

ヨハネ第一の手紙 3 章 10 節-23 節

メッセージ: イエス様とともに歩むことは、良き働きでクリスチャンの愛をあらわすこと

OIC の皆様、おはようございます。ようこそ神の家へ来られました。皆様を歓迎いたします。

1. 今日は、使徒であったヨハネの手紙第一の続きです。聖書全体がそうですが、この聖書箇所も聖霊様によって示されて書かれたものです。これまでの使徒ヨハネの手紙第一からのメッセージで、私はヨハネのクリスチャンへの手紙で示された意味を引き出そうとしてきました。このヨハネの手紙第一は、イエス様と共に親密に歩むことによって、クリスチャンが神の御心を行えるようにするためでありました。このヨハネの手紙第一でヨハネが第 1 章から第 2 章 2 節 光の中を歩み、罪を犯さないこと
2. 第 2 章 2 節から第 2 章 14 節 愛のうちに歩むこと、特に兄弟姉妹であるクリスチャンを愛すること
3. 第 2 章 15 節から 25 節 聖い (きよい) 心と神を望む心とともに歩むこと
4. 第 2 章 26 節から第 3 章 9 節 あなたがたに教え助けてくださる聖霊様とともに歩むこと  
そして今日、私は 5 つ目の点を付け加えます。
5. 第 3 章 11 節から 23 節 クリスチャンが愛を持って歩むことは、良い働きによって示されなければならないこと

さて、使徒ヨハネは、彼の以前の教えを私達に思い起こさせます。これらの使徒ヨハネの教えは、真のクリスチャンに必要な教えと確信を与えてきました。ヨハネの手紙第一 3 章 10 節で、ヨハネはこう言っています。 : 神の子と悪魔の子との区別は、これによって明らかである。すなわち、すべて義を行わない者は、神から出た者ではない。兄弟を愛さない者も、同様である。

(ヨハネ第一の手紙 3 章 11 節) <わたしたちは互いに愛し合うべきである。これが、あなたがたの初めから聞いていたおとずれである。 >

最初から— ヨハネは 「初めから 」という言葉で 3 種類の初めだと考えたに違いありません :

- 1) 時が開始する前のイエス様
- 2) 地上に来られ、そしてさらに個人的に来られるイエス様
- 3) 人々とヨハネが直接会った時以来のイエス様 ヨハネによる福音書 (ヨハネ 1 章 1 節-4 節) で、御言葉であるイエス様の真の神性を最も雄弁にそして詩的に書いたのはヨハネでありました。 :

<初めに言（葉）があった。言（葉）は神とともにあった。言（葉）は神であった。この言（葉）は神と共にあった。すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。この言（葉）に命があった。そしてこの命は人の光であった。>

イエス様が地上に来られる前、人類はどんな良い始まりにも、良い結末やハッピーエンドを迎える望みは全くありませんでした。イスラエルの地の一部の神様に選ばれた人々は別として、罪、神からの分離、そして死がすべての人々を支配していました。ヨハネとイスラエルの多くの人々は、肉となられた御言葉であるイエス様を見て出会いました。これは人間の身体をされた神でした。これが人類とヨハネの地上での始まりでした。ヨハネにとっての個人的な始まりは、イエス様との関係でした。イエス様を受け入れない人たちには、ヨハネが持っていたイエス様との関係から始まる個人的な始まりは全く持つことができませんでした。ヨハネはイエス様の福音とその書簡を書き、イエス様を受け入れ、さらにイエス様の名を信じるすべての人々にとって、イエス様が永遠の命の希望であることを宣言しています。ヨハネは、ヨハネがイエス様から直接受けた確信を、これらの人々、クリスチャンに与えるために書いています。ヨハネはイエス様が十字架に架かる前の最後の過越の晩餐にいました。それは、肉の身体を持つ神であるご自身が、（ヨハネによる福音書 13 章 33 節）でこの新しい戒めを与えられたときでありました。

（ヨハネによる福音書 13 章 33 節-35 節）

<子たちよ、わたしはまだしばらく、あなたがたと一緒にいる。あなたがたはわたしを捜すだろうが、すでにユダヤ人たちに言ったとおり、今あなたがたにも言う、「あなたがたはわたしの行く所に来ることはできない」。わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう。>

さて、ヨハネは（ヨハネの手紙第一 3 章 11 節）において、その最後の晩餐と、肉体を持つ神によるその宣言に戻って指し示しています。

（ヨハネ第一の手紙 3 章 11 節）

<わたしたちは互いに愛し合うべきである。これが、あなたがたの初めから聞いていたおとずれである。>

これらのクリスチャンにとってのこの始まりは、ヨハネと同じでありましたが、必ずしもすべての人がイエス様を見たわけではありません。しかしこれは、イエス様の御名とその教えを信じることによって、イエス様との真の個人的関係を築くことなのです。

これは、神様が十戒を石板に書かれたときに燃え上がった火とともにもたらされたメッセージよりも、もっと力強いメッセージです。{十戒は（出エジプト記 20 章 1 節-17 節）に記載されています。} これは紀元前 1400 年頃のこと、キリストが地上に来られる何年も前のことでした。神様は、神様の目から見た善悪をユダヤの民に知ってもらうためにモーセが（申命記 9 章 15 節）でユダヤ人たちに言っているように十戒をモーセに与え、書かれました。

（申命記 9 章 15 節）

<そこでわたしは身をめぐらして山を降りたが、山は火で焼けていた。契約の板二枚はわたしの両手にあった。>

契約は聖書とも呼ばれ、2つの当事者（この場合は神様とユダヤ人）の間の合意です。{注：これらの言葉はタイトルを表しています： 旧約聖書、すなわち律法に基づく契約；そして、新約聖書 すなわちイエス様の血に基づく契約!} しかし、イエス様の新しい戒めは、イエス様の流された血という新しい契約、新約聖書によって人々のために買い取られた永遠の命の力を宣言し、証明し、または示すことです。この新しい戒めに従うクリスチャン達は、神様の愛、神様ご自身が、イエス様を信じる人々……クリスチャン達の中にだけ生きていることを証明し、この世に宣言します。

ヨハネは次に、最初の人殺しを例に使用しています。

（ヨハネ第一の手紙 3 章 12 節） <カインのようになってはいけない。彼は悪しき者から出て、その兄弟を殺したのである。なぜ兄弟を殺したのか。彼のわざが悪く、その兄弟のわざは正しかったからである。>

このカインによる殺人の例には、実は2つのポイントがあります。

#### 1) {カイン}悪しき者に属する

ヨハネは上の節と同じように、今でもなお善と悪、神の子と悪魔の子を対比しているのです。

（ヨハネ第一の手紙 3 章 10 節）

<神の子と悪魔の子との区別は、これによって明らかである。すなわち、すべて義を行わない者は、神から出た者ではない。兄弟を愛さない者も、同様である。>

カインは、地球史のはじまりにアダムとイブに生まれた最初の子供でした。創世記 4 章 1 節)にこうあります。<人はその妻エバを知った。彼女はみごもり、カインを産んで言った、「わたしは主によって、ひとりの人を得た」。彼女はまた、その弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕すものとなった。>ヨハネがクリスチャン達に、複数の教会の反キリストについても同じ結論を出すように指導したように、ヨハネはカインの行動によって、カインは悪に属すると結論づけました。

2) なぜ兄弟を殺したのか? - 悪の子どもたちは、善いことをする人たちに対して憎しみに満ちた嫉妬を抱くのです。これがカインが弟のアベルを殺した理由です。なぜ兄弟を殺したのか。

<彼のわざが悪く、その兄弟のわざは正しかったからである。> 悪の子ではなく神の子である私たちクリスチャンは、まだ私たちの内側に古い罪の性質を持っています。私たちがこの世を去るとき、ようやく完全な勝利と自由を手にすることができます。だから私たちは、この同じ罪、神の律法的な外れな殺意を抱く「思い」に気づき、祈らなければなりません。イエス様と親密に歩むクリスチャンは、正しいライフスタイルを持っているかもしれませんが、嫉妬と憎しみの情熱は、キリストにある兄弟姉妹に対する殺意の思いとともに、稲妻のように襲いかかることがあります。私たちは、自分達より優れているように現れている彼らの霊的賜物を妬むかもしれません。あるいは、あるクリスチャンが私たちに残酷な仕打ちをしたので、私たちは復讐の念に駆られるかもしれません。イエス様の弟であるヤコブは、クリスチャンに向かって、次のように警告しています。

3)

(ヤコブの手紙 4 章 2 節-3 節) <あなたがたは、むさぼるが得られない。そこで人殺しをする。熱望するが手に入れることができない。そこで争い戦う。あなたがたは、求めないから得られないのだ。求めて与えられないのは、快樂のために使おうとして、悪い求め方をするからだ。> ヨハネもヤコブと同じように、私たちクリスチャンの古い性質が雑音を立てることを知っていました。そして、聖霊様のチェックや警告を感じなければ、その雑音は私たちの心の中で罪深い思考となってしまおうでしょう。その結果、仲間の信者に対する外的行為が生じるかもしれません。それゆえ、神様の助け主である聖霊様とともに歩むのです。:

(ヨハネ第一の手紙 3 章 12 節) <カインのようになってはいけない。>

これは次の節 (ヨハネ第一の手紙 3 章 13 節) に合致します。<兄弟たちよ。世があなたがたを憎んでも、驚くには及ばない。> 地球の約 75%は悪の子どもたち (まだクリスチャンでない) です。日本では、国民の約 99.5%が悪の子どもたち (まだクリスチャンでない) です。“建前”社会の教しえのため、ここにより憎しみが隠されているかもしれませんが、OIC の信徒のみなさん、驚かないでください。私達が神様に願えば、世が憎めば憎むほど、神様の聖霊様は私たちに彼らへの愛を与えてくださいます。

聖書(ヨハネ第一の手紙 3 章 14 節) <わたしたちは、兄弟を愛しているので、死からいのち移ってきたことを、知っている。愛さない者は、死のうちにとどまっている。愛のないクリスチャンは、自分の中にイエス様を持つことはできません。> 神様の種であるイエス様は、信じるすべての人の心に愛をもたらします。愛のないクリスチャンは霊的に死んだままか偽りのクリスチャンです。ヨハネも (ヨハネ第一の手紙 3 章 14 節) で次のように述べています。<わたしたちは、兄弟を愛しているので、死からいのち移ってきたことを、知っている。> イエス様はこれと同じ表現を (ヨハネによる福音書 5 章 24 節) で用いていることを思い出してください。: <“よくよ

くあなたがたに言う。わたしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠の命を受け、またさばかれることがなく、死から命に移っているのである。>”

次に、ヨハネは（ヨハネの第一の手紙 3 章 15 節）でこう書いています。<あなたがたが知っているとおりに、すべて兄弟を憎む者は人殺しであり、人殺しはすべて、そのうちに永遠のいのちをとどめてはいない。> すでに述べたように、“しかし、嫉妬と憎しみの情熱は、キリストにある兄弟姉妹に対する殺意とともに、稲妻のように襲いかかる”ことがあります。ヤコブはこう書いてます。<嫉妬からくる憎しみの稲妻のような閃光でさえ、容認できません。> クリスチャン達は、聖霊様が私たちの心の中にある仲間のクリスチャンへの憎しみを示すとき、即座に祈らなければなりません。たとえ一瞬の思いであっても、即座に祈りによって対処しなければなりません。みなさん、これは日本のマキシムインスタントコーヒーよりもさらに即座に強く、即座の祈りであるべきです。（ローマ人への手紙 6 章 11 節）にあるように、聖霊様が私たちを助けてくださいます。<このように、あなたがた自身も、罪に対して死んだ者であり、キリスト・イエスにあって神に生きている者であることを、認めるべきである。>

次に、この訳が最も多く使われていて、「憎む者なら誰でも」とは誤解を招きます。ギリシャ語新約聖書の動詞の時制は、はっきりとこう言っています：<他の兄弟姉妹を憎み続ける者は、心の底から殺人者である。そして、人殺しには永遠の命がないことを、あなたは知っている。>

次のことに留意してください--- また、ノンクリスチャンを憎むことも神には受け入れられないと留意する事が重要です。主イエス様は、私たちみんなにマタイによる福音書 5 章 44 節を教えられました。<しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ。> 聖書は、私たちの主イエス様がそうであるように、私たちクリスチャンが全宇宙でただ一人の存在、悪魔を憎むことを認めています。（ヘブル人への手紙 1 章 8 節-9 節）にこうあります。<御子については「神よ、あなたの御座は、世々限りなく続き、あなたの支配のつえは、公平のつえである。あなたは義を愛し、不法を憎まれた。それゆえに、神、あなたの神は、喜びのあぶらを、あなたの友に注ぐよりも多く、あなたに注がれた」と言い、>

（ヨハネ第一の手紙 3 章 16 節）<主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである。> 愛の感情は素晴らしいです。しかし、そうであっても、本当の愛は自分から何かするものです！ イエス様は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さいました。今、ヨハネはクリスチャンに、単なる感情や友好的な会話ではなく、互いに愛の行いをする責任があることを指摘しています。：（ヨハネ第一の手紙 3 章 16 節）<それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである。> イエス様は、私たちがどの程度の時間と犠牲を払えばこれを実行できるかを知っておられます。しかし、特に厳しい試練にさらされているクリス

チャンに対しては、祈りを持って優先順位を確認しなければなりません。そのような試練は、(ヨハネ第一の手紙 3 章 17 節)のように経済的なものかもしれません。<世の富を持っていながら、兄弟が困っているのを見て、あわれみの心を閉じる者には、どうして神の愛が、彼のうちにあるうか。>

あわれみの心を閉じる - 神様は、困っているクリスチャンの必要性と、与える人の心や手段や経済状態を見ておられます。私の好きな賛美歌のひとつが、はっきりとこう言っています。:<神がその中におられるなら、小さいことは大きなことだ!> しかし、ヨハネはもし誰かが裕福に暮らせるだけのお金を持っているなら、その人はキリストにあって苦しんでいる兄弟や姉妹を助ける重荷や要求があると強調しています。

(ヨハネ第一の手紙 3 章 18 節)

<子たちよ。わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって愛し合おうではないか。>

ヤコブもまた、信仰によって救われるが、行動を行なわない言い訳にはならないと書くように促されました。(ヤコブの手紙 2 章 18 節): <しかし、「ある人には信仰があり、またほかの人には行いがある」と言う者があろう。それなら、行いのないあなたの信仰なるものを見せてほしい。そうしたら、わたしの行いによって信仰を見せてあげよう。>

これは(ヨハネ第一の手紙 3 章 18 節)と一致します。<子たちよ。わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって愛し合おうではないか。>

(ヨハネ第一の手紙 3 章 19 節): <それによって、わたしたちが真理から出たものであることがわかる。そして、神のみまえに心を安じていよう。>

Bruce 牧師先生、ヨハネは(ヨハネ第一の手紙 2 章 28 節)でキリストの再臨を指しているのだろうか?とあなたは尋ねるかもしれません。それは次のようなものです。<そこで、子たちよ。キリストのうちにとどまっていなさい。それは、彼が現れる時に、確信を持ち、その来臨に際して、みまえに恥じることがないためである。> 仲間であるクリスチャンに対して憐れみもなく、惜しむ振る舞いをするクリスチャンはだれでも、イエスが再臨されるときに恐れおののき、身を縮めることになるはずです。先週のメッセージのように、これは私の「クリスチャンが萎縮してしまう原因」に当てはまるかもしれません。 #1) 敵対する世界で安全でいること.... 天の宝を得ることよりも、地上の経済力を得ることを人生の主な目的としていることが多いです。主イエス様は(マルコによる福音書 8 章 36 節)において、この弱さを私たちに警告されました。<人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になるうか。> これでは、神様の前に立つときに自信を持つことができません。これは(ヨハネの第一の手紙 3 章 19 節)によって確認されるか、あるいはそのように思われます。<それによって、わたしたちが真理から出たもので

あることがわかる。そして、神のみまえに心を安じていよう。＞ だから、私の答えは YES です！…… 「私たちの行動」、あるいは「あらゆる行動の欠如」は、イエス様を見るときにたじろぐ本当の理由です。

罪悪感 - 最も慈愛に満ちたクリスチャンの中には、他の人に愛情深く、繊細な感覚を持っている人達があります。これらの信者の方達は他の信者の方達に愛を示します。しかし、彼らは時として、自分自身の失敗や完璧さの欠如に敏感すぎるところがあります。真のクリスチャンにとって、神様の目に真の「罪悪感」はありえません。神の目から見た真の「罪」は、ノンクリスチャンにしかありえないのです。クリスチャンのこの感情の状態の本当の意味を引き出すには、ギリシャ語訳 (NTG) が必要とされます。

(ヨハネ第一の手紙 19 章 NTG) <それによって、私たちは自分が真理から出た者であることを知り、主の御前で良心を安らかにすることができるのだ >

クリスチャンの良心が、神の御心に反する「罪の感情」を生み出しているのかもしれませんが。クリスチャン家庭で育たなかった多くのクリスチャンは、両親の悪いしつけや虐待、あるいは単に神の御言葉を知らなかったために、良心がうまく形成されなかったり、ねじれたりすることがあります。このような親は愛情深い親かもしれませんが、クリスチャンだけが子供に与える神の愛の真の力を持っているのです。イエス様は、そのようなクリスチャンが、イエス様が再臨され、顔と顔を合わせる前に、良心からすべての誤った感情を取り除くことを望んでおられます。これは、(ヨハネの手紙第一 3 章 20 節) でより明確になっています。<なぜなら、たといわたしたちの心に責められるようなことがあっても、神はわたしたちの心よりも大いなるかたであって、すべてをご存じだからである。>

ギリシャ語訳は、クリスチャンの誤った良心の形成に対して、より強力な助けとなります。健全な良心は、私たちが罪を犯さないように、私たちの内側に赤旗や警告アラームを掲げます。聖霊様が同意し、私たちはイエス様のアーメンを感じます。真のクリスチャンにとって、“なぜなら、たといわたしたちの心に責められるようなことがあっても” というこの言葉は、神の目から見れば、単なる真実でない良心にすぎません。聖書は (ローマ人への手紙 8 章 1 節) でこう宣言しています。<こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない。> しかし、自己非難という良心の暴走や大声、誤った形成は、クリスチャンがイエス様と親密に歩む妨げになります。もしあなたが、「それは私のような、私に何ができるだろう？」と言うのなら

1. 覚えて暗記しなさい (ヨハネ第一の手紙 3 章 20 節 / NTG 版または NASB 版、ほとんど同じである) : <神はわたしたちの心よりも大いなるかたであって、すべてをご存じだからである。>.

2. 祈りなさい！ あなたの良心を癒してくださるよう神に願いなさい。あなたの良心が、神様と神様の聖なる御言葉により一致するように、神様の聖霊様があなたの良心を圧倒的な力で覆ってくださるようお願いなさい。

3. 助言を求めなさい あなたの牧師である、私に相談することを勧めます。面談予約は OIC 事務所までお電話ください。これが私がここにいる理由のひとつでもあります。

罪の意識がない良心による大きな祝福は、（ヨハネ第一の手紙 3 章 21 節）にあります： <愛する者たちよ。もし心に責められるようなことがなければ、わたしたちは神に対して確信を持つことができる。>

大胆な確信 - 大胆な確信をもって神に近づき続けるクリスチャンは、御霊によってさらに勇気ももつようにされるでしょう。神様は、親愛なる神の子供たちが大胆な確信をもって神のもとに来ることを愛しておられます。私は、主はクリスチャンが不満を自分の中だけに留めておくよりも、あるいは他のクリスチャンだけに留めておくよりも、主へ正直な不満をもたらして、そのことへの神からの答えを期待することを望んでおられると信じています。

私は Charles Haddon Spurgeon さんが祈りについて「祈りは、天の父なる神様に向かって銀の矢を放つようなものでなければならない。」とクリスチャンに言ったことが好きです。Spurgeon さんの考えは、神はあなたの矢が愛にあることを知っているが、戦士のように結果を出さなければならないということです！ここでも、罪悪感を抱くクリスチャンは、大胆な祈りをためらうでしょう。だからこそ、「罪の意識」を抱いているクリスチャンは、一刻も早く癒され、恐れに満ちた世の中で勇気をもって、イエス様に近づき、前進して歩まなければならないのです！

（ヨハネ第一の手紙 3 章 22 節）には、答えられた祈りに対する約束が満ち溢れています。： <そして、願い求めるものは、なんでもいただけるのである。それは、わたしたちが神の戒めを守り、みこころにかなうことを、行っているからである。>

<それは、わたしたちが神の戒めを守り、みこころにかなうことを、行っているからである。> - ヨハネはこの手紙の前半で、イエス様の戒めに従うことが、私たちが真のクリスチャンであると確信するために不可欠、あるいは重要であると述べています。このことは、（ヨハネ第一の手紙 2 章 3 節）を見てもわかります。<もし、わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである。> 救いは賜物であり、私たちクリスチャンが何かをしたからではなく、ただイエス様と、私たちの罪を取り除いてくださったイエス様の犠牲の死を信じるだけなのです。しかし、クリスチャンがこうして生まれ変わった後、従順は不可欠でありまたイエス様との「親しい歩み」の一部であります。イエス様との親密な歩みを持ち、罪の意識のない良



心を持つことで、クリスチャンはイエス様の正しい御名によって、私たちの大きな全能の父なる神に大きなことを自由に求めることができます。

<そして、願い求めるものは、なんでもいただけるのである>- あなたは、Bruce 牧師、私は欲しいものをすべて受け取ることができるのですか、と尋ねるかもしれません。というのは、(ヨハネ第一の手紙 3 章 22 節) に<そして、願い求めるものは、なんでもいただけるのである。>とあるからです。クリスチャンがイエス様と親密に歩むとき、父なる神様が彼らクリスチャンから求められるのを待っておられるものを、クリスチャンがしばしばその同じものを求めることは驚くべきことであります！それでも、私たちの愛する天の父は「Yes」、「待ちなさい」、「No」！と言うかもしれません。私たちは、「天の父は最善を知っている」ことを知っているからです！しかし、何年も経ってから、私たちはしばしば、主が「No」ではなく「待ちなさい」と言っていたことに気づきます！イエス様を通しての神様との真の関係とは、神様が私たちの祈りに個人的な答えを与えてくださることを知ることであり、それはしばしば、私たちが求めた以上のものを意味します。神様の祈りの答え、「Yes」か、「Wait」か、「No」！かを聞くまで満足してはいけません：これは(ヘブル人への手紙 11 章 6 節)に明らかです。<信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますこと、ご自分を求める者に報いて下さることを、必ず信じるはずだからである。> 私は、神様が私達の祈りに従って行動して下さるという感覚を持たずに、ただ「私はそれについて祈りました！」と言うクリスチャンを全く理解することができませんでした。愛する父なる神様が祈りに答えてくださることを期待しないなら、なぜ祈るのですか！

粘り強い祈りは、忍耐強い祈りです。粘り強く祈り続けるクリスチャンは、驚くべきことが起こることに気づきます。神様は多くの祈りに答えてくださる前に、クリスチャンが忍耐する間に信仰を高めてくださいます。クリスチャンは持続し続けられるようさらに神様の力を受けます。(使徒行伝 14 章 22 節) <信仰を持ち続けるように。> 成長したクリスチャンは、忍耐して粘り強く祈り続けます。神様は、地上での一時的な利益よりも、クリスチャンがキリストにあって信仰を守り、永遠に安全であることにもっと関心を持たれています。しかし、クリスチャンの信仰が成長し、イエス様とともにより親密に歩むようになると、あの日本のマキシムインスタントコーヒーのように、祈りが即座に力強く答えられる季節が来ると、私は確信しています。

次に、今日のメッセージの最後、(ヨハネ第一の手紙 3 章 23 節) です。<その戒めというのは、神の子イエス・キリストの御名を信じ、わたしたちに命じられたように、互いに愛し合うべきことである。> ヨハネは伝道者であると同時に牧会的な著者でもあります。ヨハネは前節で、父なる神様がクリスチャンの祈りに答えてくださることを記しています(ヨハネ第一の手紙 3 章

22)。そして、(ヨハネ第一の手紙3章23a節)ここにイエス様の福音を宣べ伝えることを次のように付け加えています: <その戒めというのは、神の子イエス・キリストの御名を信じ> これは{天の父の}戒めです。ヨハネは前節で、従順なクリスチャンの祈りに対する父なる神様の答えについて次のように書いています(ヨハネ第一の手紙3章22節)。次に、天の父なる神様への従順に従わなければならない御子への従順へつないでいます。それは(ヨハネ第一の手紙3章23b節)です。<わたしたちに命じられたように、互いに愛し合うべきことである。> クリスチャンになるためには、罪人である私たちは皆、御子イエス様を信じるという天の父なる神様の命令に従わなければなりません。今、私たちは神の子の命令にも従うことができ、良い働きによって示すクリスチャンの愛のうちに、イエス様とともに歩むことができます。そして、私たちはイエス様に信頼し、恐れに満ちた世界で勇気をもって、イエス様と親密に前進して歩むことができます!

祈りましょう